

小学校における運動促進、体力向上の取組と 児童の体力・運動能力，運動嗜好との関係

◎中野貴博，高橋好波，後藤晃伸，佐野孝，加納裕久
可西泰修（中京大学），宮田洋之（仙台大学）

調査対象・分析データ

（調査対象・分析データ）

学校を対象とした調査データと自治体より提供を受けた児童の体力・運動能力テストの二次利用データをマッチングさせたデータを分析データとした。

（学校調査）

A県内15市町村の小学校209校。

体力向上研修時に実施し，回答者は研修出席者（主に体育主任）であった。研修を欠席した学校は郵送にて実施した。

（児童の体力・運動能力テスト）

全国体力・運動能力，運動習慣等調査（小5）におけるA県データを二次利用の許可を得た上で利用した。

最終的に学校と児童のデータがマッチングされた192校のデータを分析対象とした。

目的

子どもの運動促進や体力向上のために学校現場では様々な取組が実施されている。しかし，取組の効果や取組状況の差異による子ども達の運動嗜好や体力・運動能力の違いに関しては，あまり検討されていない。

そこで，本研究では，学校における運動促進や体力向上の取組と児童の体力・運動能力，運動嗜好との関係を検討することを目的とした。

調査・測定項目（分析項目）

（調査・分析対象項目）

5つの大問からなる質問紙を作成。その内，本研究では，以下の内容に関連する項目について分析検討を行った。また，調査の冒頭には，調査に関する説明文書を付し，調査の回答への同意を得た。

【従属変数】

- 児童の体力総合評価（5段階：A～E）
- 「運動が好き」「運動が嫌い」に対する児童の回答割合

【独立変数】

- 教員の意識に関する（4項目）
 - 「体育主任以外の教員の問題意識」「体育主任以外の先生の協力」「運動促進や体力・運動能力向上を強く意識している教員の割合」「体育の授業があまり得意でない教員の割合」
- 学校としての取り組みに関する項目（4項目）
 - 「運動促進や体力・運動能力向上の計画の有無」「学校の取組状況の満足度」「体力テスト結果の活用」「研修等で得た知識，技能の活用」

分析方法

【分析データの加工】

1. 学校ごとのデータへの変換

- 児童の体力総合評価（5段階：A～E）
- 「運動が好き」「運動が嫌い」に対する児童の回答割合
⇒ 児童個々人のデータを学校単位で性別に集計
⇒ 各評価および回答の選択割合を算出し変数化

【データ分析手続き】

1. 児童の体力総合評価への効果

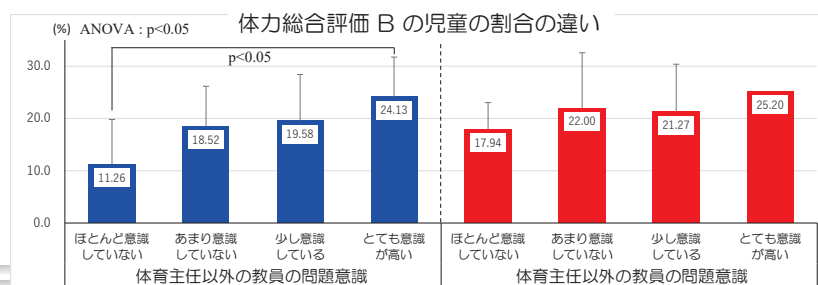
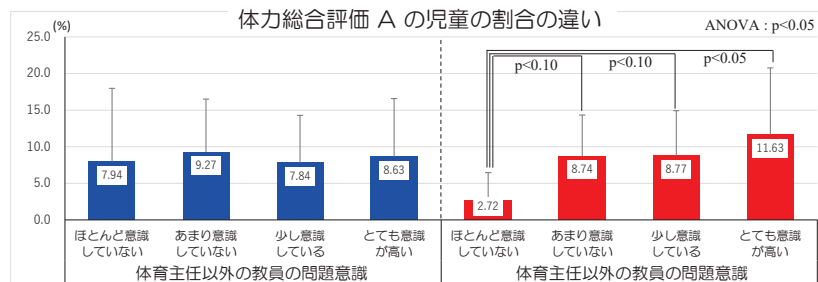
〔教員の意識（4項目）
学校としての取り組み（4項目）〕 × 児童の体力総合評価（5段階：A～E）の割合
⇒ 一元配置分散分析，Bonferroni法による多重比較

2. 「運動が好き」「運動が嫌い」への効果

〔教員の意識（4項目）
学校としての取り組み（4項目）〕 × 「運動が好き」「運動が嫌い」に対する回答割合
⇒ 一元配置分散分析，Bonferroni法による多重比較

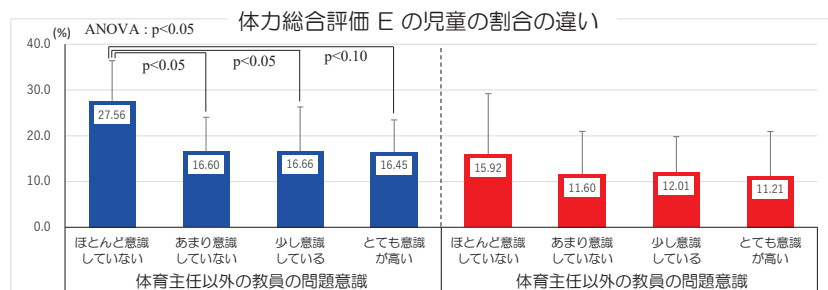
結果（児童の総合評価への効果）

（体育主任以外の教員の問題意識の程度による違い）



結果（児童の総合評価への効果）

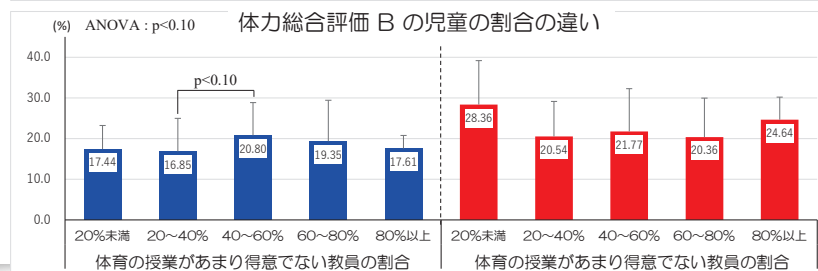
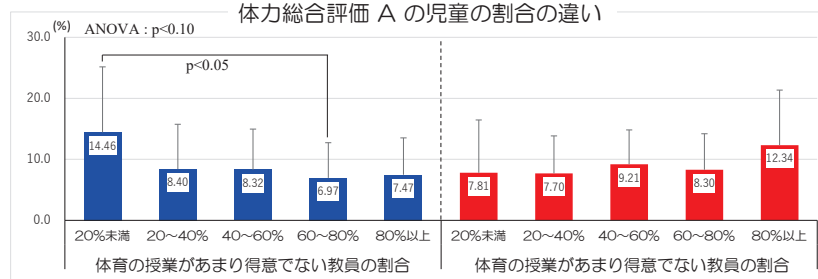
（体育主任以外の教員の問題意識の程度による違い）



体育主任以外の教員の問題意識が高いほど、男子では評価B，女子では評価Aの児童の割合が高くなることが確認された。また、体力水準の低い評価Eの児童の割合に関しても、特に男子で体育主任以外の教員の問題意識が高いほど、低くなることが確認された。

結果（児童の総合評価への効果）

（体育の授業があまり得意でない教員の割合による違い）



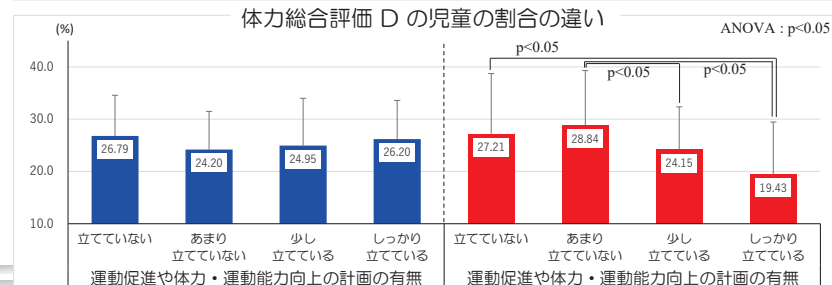
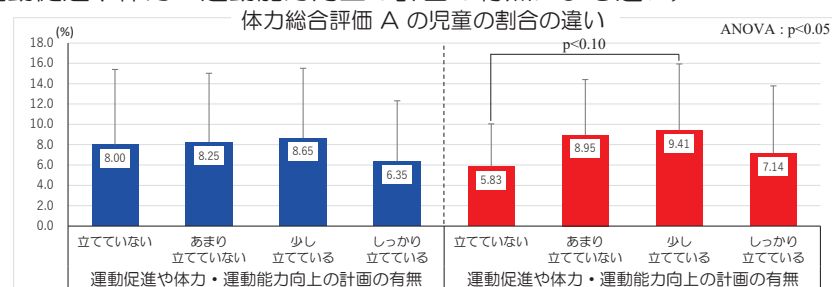
結果（児童の総合評価への効果）

（体育の授業があまり得意でない教員の割合による違い）

男子では、体育の授業があまり得意でない教員の割合が少ない学校の方が評価Aの児童が多くなっていました。一方、女子では、体育の授業があまり得意でない教員の割合が多い学校でも評価Aの児童が多くなっていました。男子ではより専門的な指導が、女子では過度な専門性がない教員による工夫が背景にあることも考えられる。

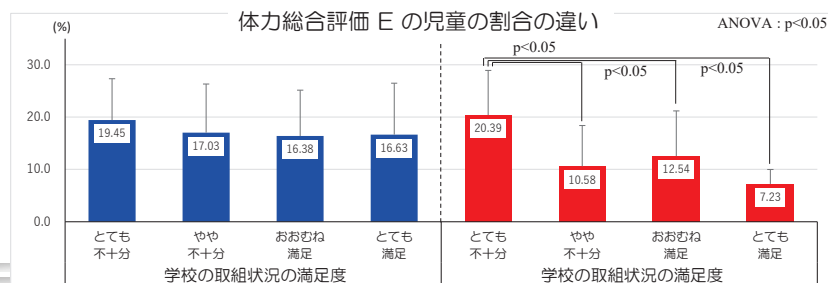
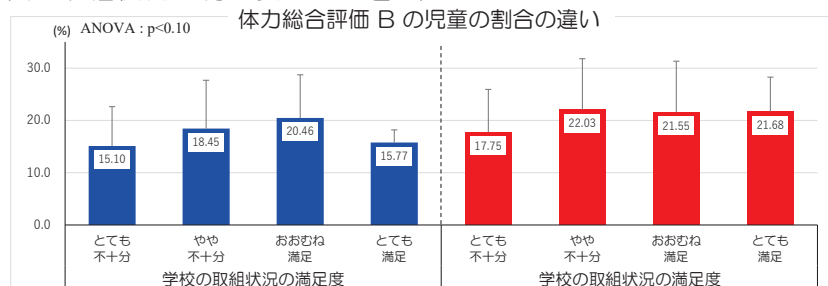
結果（児童の総合評価への効果）

（運動促進や体力・運動能力向上の計画の有無による違い）



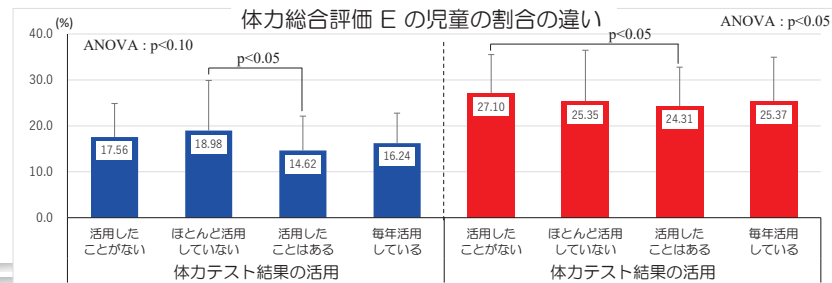
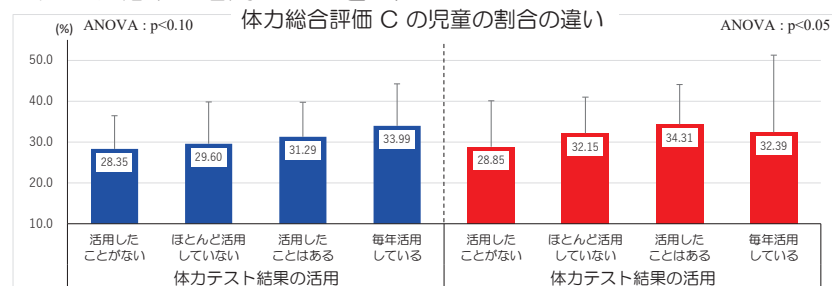
結果（児童の総合評価への効果）

（学校の取組状況の満足度による違い）



結果（児童の総合評価への効果）

（体力テスト結果の活用による違い）



結果（児童の総合評価への効果）

（体力テスト結果の活用による違い）

特に女子においては、運動促進や体力・運動能力向上の計画をしっかりと学校で立てている学校ほど、評価Aの児童が多く、評価Dの児童が少なくなることが確認された。

（学校の取組状況の満足度による違い）

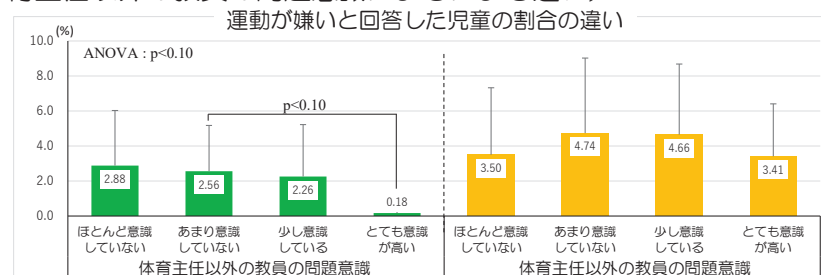
体育主任者が学校の取組状況に満足している学校ほど評価Bが多く、評価Eは少なくなる傾向が確認された。

（体力テスト結果の活用による違い）

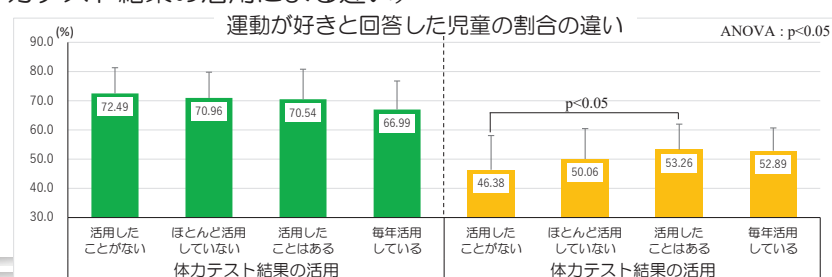
体力テスト結果の活用が多い学校ほど評価Cは多く、評価Eが少なくなる傾向が確認された。

結果（運動が好き・嫌いへの効果）

（体育主任以外の教員の問題意識による違い）



（体力テスト結果の活用による違い）



結果（運動が好き・嫌いへの効果）

（体育主任以外の教員の問題意識による違い）

体育主任以外の教員の問題意識が高いほど、特に男子で「運動が嫌い」と回答する児童が高くなる傾向が確認された。女子では、「ほとんど意識していない」の群で矛盾した結果であったが、元々運動好きが多いために、ほとんど意識していないということもあるのかもしれない。

体力テスト結果の活用が多い学校ほど、特に女子で「運動が好き」と回答する児童が増加する傾向が確認された。

まとめ

- ☆ 教員の意識に関しては、「体育主任以外の教員の問題意識」が高いことが重要であることが示唆された。
- ☆ 学校としての取り組みに関しては、「運動促進や体力・運動能力向上の計画を持つこと」「体力テスト結果を活用すること」が有効であることが示唆された。
- ☆ 上記の効果は、特に、体力総合評価がC～Eの相対的に体力の低い児童の減少に対して有意な効果を示しており、また、性別では女子の方がより多く効果が見られた。

「運動促進や体力・運動能力向上の計画を持つこと」「体力テスト結果を活用」すること「体育主任以外の教員の問題意識」を高めることが重要である。